

はじめに

人間としての生き方を求めた授業実践 ～「よろこび」第3号に寄せて～

私は「よろこび」という冊子を1991年度末にまとめた。自分の教育実践をまとめるということは、私の大きな夢でもあった。それまでも毎年毎年、道徳の授業や部落問題学習の授業は記録にしていたが、それはそのときだけのものであり単発に終わり、その一つ一つの授業を積み上げていくものにはなっていなかった。その営みを総括する意味においても、「よろこび」という冊子をまとめることは私にとってとてつもなく大きな意義があった。

1991年度は、もうこんな年は決してないと言えるほど、さまざまな研究大会を経験し、その中で授業を公開してきた。4月、第1回全体学習公開授業、5月、徳島県中学校道徳教育研究会研究授業、6月、板野郡同和教育研究大会公開授業、10月、全日本中学校道徳教育研究大会徳島大会特別公開授業、11月、徳島県中学校同和教育研究大会公開授業、これほどの大きな舞台はないぐらい、大きな舞台に立たせてもらった1年間であった。そして、その授業を積み上げていくことによって生徒たちも私自身も大きく前進してきたし、多くの人の大きな影響を与えてきた。その年の年度末にまとめた「よろこび」は、まさしく私の宝物となった。この冊子がまぎれもなく私の原点となっている。私はその「よろこび」という冊子に、第1号と刻んだ。それはこの「よろこび」第1号をスタートにしていくという願いがあったからだった。どこまで続くかわからない、とにかくひたむきに生きていこうという決意がそこにあった。

その翌年、1992年度末に、「よろこび」第2号をまとめた。この冊子は、私を部落差別から解放していく大きなきっかけとなった。その冊子の冒頭に綴った「スタチの苗木とキンカンの苗木」は、私にとって革命的な文章であった。私の心の中に潜んでいる差別意識と向き合うスタートとなった。部落解放とは自己解放から始まっていくことを実感したのが、この「よろこび」第2号である。同和教育という営みが本当にうれしくてたまらない自分の生命をキラキラ輝かせていく取り組みであることを実感したこと、それは私に大きなよろこびを与えてくれた。

「よろこび」第2号から3年が経過した1994年度、この1年も私にとって忘れることは絶対のない1年間となった。第46回全国同和教育研究大会徳島大会特別報告、また、1993年度にかかわった文部省中学校道徳教育読み物資料の中に私がまとめた部落問題にかかわる作品、「スタチの苗木」と「峠」が世に出た年でもある。それらの営みを「よろこび」第3号にまとめておきたいと思う。

私が授業記録を初めてまとめたのは、1986年度当時勤務していた板野郡藍住中学校で文部省指定同和教育研究発表会の公開授業だった。その公開授業で私は「水平社宣言」に取り組んだ。あの研究発表会に向けて学んだものは今も私にとって大きな財産となっている。その授業は、ビデオに収められているが、当時の生徒とみんなが成人したらあの授業と一緒に見ようと約束したことがあった。その記憶は私の中で薄れていたが、成人式の日には4名の生徒が振り袖姿で私の家にやってきた。共にビデオの授業に思いを馳せたが、何とも言いがたい感動がそこにあった。人間としての生き方を求めた授業の営みというものは永遠である。

私は1987年から1989年までの3年間、鳴門市瀬戸中学校に勤務した。1987年度、1988年度の2年間、瀬戸中学校は道徳教育推進校として文部省の指定を受けており、当時私

は、道徳教育主任という立場で道徳教育の研究推進にかかわってきた。瀬戸中学校のグラウンドのすぐ横は、小鳴門海峡であり教室の窓から海が見える。このような学校は全国をさがしても珍しいと思う。私は、1987年も1988年も研究授業のスタートに「瀬戸のかじこ」という作品を学習してきた。瀬戸の子どもたちの語る人間の生き方は、人間の誠実を貫くものであり、その営みは、私に新たな世界を示してくれた。学級旗を掲げクラス全体で海をバックに写した写真は、その当時のことをなつかしく思い出させてくれる。

瀬戸中学校での最後の年となった1989年は2年生を担当した。久しぶりの2年生担任、子どもたちとの営みは本当に私の心を温かくしてくれた。今回の冊子に掲載することはできなかったが、その年には古典落語「芝浜」や「渋染一揆」の授業を始めとして、8つの授業記録をまとめている。その一つ一つに生き生きした生徒の姿が綴られている。今回の冊子には、修学旅行での平和学習に向けて取り組んだ「ヒロシマの歌」の授業を掲載している。その修学旅行は、本当に楽しいものであった。それは修学旅行に向けた取り組みが熱いものであったから、意義深い修学旅行になっていったんだと思う。

そんな瀬戸中学校での思い出を胸に私は1990年に板野中学校に赴任した。その年、私は2年生を担当した。その学級開きの日、私は板野中学校に寄せる思いや、自分自身のために取り組んでいこうとしている同和教育を語っていった。その板野中学校の体育館は、それ以後全体学習の舞台となっていくのだが、赴任当時の私にとっても格別の思いがあった。その体育館は、私が教員になった年、初めて佐藤文彦先生（「礼が遠くなる」「美しさを求めて生きる人生を」は佐藤先生の作品である）の講演を聞いた場所であった。そのときの佐藤先生の講演は今も鮮やかに心に刻まれている。

「人間の悲しみが見えなくて、幸せが見えるでしょうか。私は人間として人の悲しみや苦しみがわかる人間でありたい。」

これは佐藤先生がその講演の冒頭で語られた言葉だった。その講演は本当にショックだった。私の中にあった同和教育が根本から変わっていった。佐藤先生を初めて知り、佐藤先生と初めて出会った板野中学校の体育館は、ある意味で私自身が同和教育に目覚めた場所であり、部落の人間としてどう生きるかという生き方を明確に求めさせていくスタートになった場所だった。

赴任した1990年5月、その体育館で全体学習がスタートする。その全体学習については、この冊子の17頁に詳しく掲載しているのでご覧いただきたい。

1990年度の授業記録は、板野中学校での1番最初の全体学習となった「渋染一揆」の授業記録、そして、私自身の大きな目覚めになった「私の目をみて！」の授業記録を掲載している。「私の目をみて！」の授業は、第4回目の全体学習の翌日に取り組んだものであり、私の人生において大きな意味を持っている。今回初めてその授業のすべてをまとめることができた。その授業後の感想は、今も私に強烈な感動を残している。本当の思いを語る同和教育のあり方が自分の中ですっきりととらえられたこの授業は、まさしく私の原点になっている。

この1990年度の取り組みが土台となって、1991年度につながっていくが、この年の授業は本当にすごいものがあった。その一つ一つに込めた願い、その営みは部落解放への営みそのものであったと思う。

徳島県中学校道徳教育研究会での研究授業として取り組んだ「礼が遠くなる」は、佐藤文彦先生の作品であり、板野郡同和教育研究大会の公開授業で取り組んだ「同和教育への希い」は丸岡忠雄先生の講演を佐藤文彦先生が編集したものである。その資料には格別の思いがあった。

その板野郡同和教育研究会の公開授業（161頁）によって、私は生徒の底知れないエネルギーというものを心の底から自覚する。そして、そのエネルギーは全日本中学校道徳教育研究会特別公開授業（177頁）におつけられた。「ナイン」（井上ひさし）という部落問題とは全く関係のない作品で、部落問題学習の大切さを訴えた授業は、徳島県中学校同和教育研究会の公開授業（193頁）へとつながっていく。その作品は西口敏夫先生の「水平社宣言讃歌」であったが、生徒たちはその授業の中で大きく成長していった。そして、この授業は、部落問題学習の本質を私なりにつかませてくれた授業となった。この思いについては第46回全国同和教育研究会特別報告（16頁）をご覧ください。

1992年度は、その年の第1回全体学習公開授業を掲載した。その資料は、佐藤文彦先生の講演記録「美しさを求めて生きる人生を」である。この資料もさまざまな学習の場で活用されることを願っている。また、この冊子の表紙になっている「Y子が獅子になった」の授業記録も掲載した。30年前に描かれた獅子の絵が今もこの作品と重なって、私の中に怒りがこみ上げてくる。そして、1992年度は、卒業式の前日に取り組んだ全体学習を掲載している。この授業は、公立高校の入学試験が終わった夜、生徒たちの訴えによって成立した授業である。この授業の中で語られ訴えられた生徒の本当の思い、人間の真実の訴えがどれほど心を打つか、そのことを実感した授業であった。この底に流れる悲しみや怒りを糧として前進していきたいと思う。

1993年度、前年度卒業生が残してくれた卒業式前日の全体学習が大きな力となってその年の部落問題学習は熱いものになっていった。学級開きとして取り組んだ詩「峠」（真壁仁）の授業記録、進路公開の授業記録、映画「学校」（山田洋次監督）に寄せる授業記録、その一つ一つがとてつもなく新鮮である。また、文部省中学校道徳教育読み物資料の中に初めて部落問題にかかわる資料として掲載された「峠」についての授業記録も掲載している。これらの授業についても、242頁以降で詳しくふれているのでご覧ください。

1994年度、私は初めて中学1年生を担当した。入学式の感動に思いを込め、その日に語った願いや思い、それはまさしく詩「峠」であった。その生徒たちと取り組んだ第1回目の全体学習、それは最も身近な部落問題である学習会についてであった。「学習会の友」という作品、その作品に寄せて中学1年の生徒たちはひたむきに健気に思いを語っていく。その授業は学年全体の授業記録も掲載している。一つのクラスの授業がどのように学年全体に広げられていくか。その授業の底に流れるものを読みとっていただきたい。もう一つその年は、4回目の全体学習での全体授業を掲載している。「ふるさと」（丸岡忠雄）の詩に寄せて、語られていく学年全体の思い、その中で生徒たちがキラキラ輝く授業となった。その授業は止めどなく思いが語られとてつもなく長い授業となっているが、どの場面においても生徒の輝きを感じる。中学1年生のひたむきな生き方にふれていただきたいと思う。

この10年近くの取り組み、その中で私は本当に変わってきた。自分の中にあった卑屈さやこだわりが一つ一つ自分の中から消えていった。人間は強くなれるということ自分の歩みの中からも確かめることができる。そして、この歩みには終わりが無いということ、これで終わりが無いということを実感している。人間は歩き続けられない限り真に解放されることはないと思う。今一度私自身の歩みを見つめ直していく「よろこび」第3号にしたい。